

第 68 回 海の道と東西世界①

1 「海の道」 2 世紀

・東西世界を結ぶ交易路としては、古来よりユーラシア大陸を通る「草原の道」と「オアシスの道」が有名であった。

→他に海上貿易を中心とする「」があった。

・2世紀頃、ローマ帝国、インドの（）、中国の漢との間で、（）を利用した交易が盛んに行われていた。

→季節風交易の様子は『』に詳しく書かれている。

→インドと中国の中継地である東南アジアには、多くの（）が栄えた。



2 「海の道」 8 世紀

・（）の都（）は、ペルシア湾の港バスラなどを通じて東西交易の中心地となり、発行された金貨や銀貨は広く流通した。

・特に（）と呼ばれる帆船を用いたムスリム商人が、アラビア半島、アフリカ、インド、東南アジア、中国にいたる広い地域で交易を行っていた。

→ムスリム商人は中国にも来訪し、貿易を管理する役所として（）が唐代の広州に初めて設置された。

・『』にある「シンドバッドの冒険」の背景には、「海の道」のネットワークで活躍したムスリム商人の存在がある。



ダウ船

ダウ船は、三角帆に特徴がある。三角帆を使うと、風上に向かって航行することもできた。小型のものが多く、500 人乗りの超大型タイプもあったらしい。



ディナール金貨

ディナール金貨は、ウマイヤ朝で発行されていた金貨であり、アッバース朝でも発行された。ディルハム銀貨とともに広く使用されていた。



シンドバッド

7つの海をめぐる冒険商人シンドバッドの物語は、『アラビアンナイト』の中でも最も有名な物語のひとつである。当時のムスリム商人がモデルとされた。

3 「海の道」 9 世紀～12 世紀

・9世紀～10世紀になると、中国商人が（）と呼ばれる船を操って、南シナ海で活発に交易を行うようになった。

→銅銭や絹の他、青磁・白磁などの（）を大量に輸出したため、「海の道」は陶磁の道とも呼ばれる。

→宋代には（）が広州、泉州、明州、杭州などに置かれた。



ジャンク船

ジャンクというのは、中国語の「船」という言葉が、いろんな国の言葉を経て変化し、最終的にジャンクになったらしい。

- ・イスラーム世界ではアッバース朝の衰退後、交易の中心地は紅海を通過するエジプトの（ ）やアレクサンドリアに移った。
→カイロを都としたアイユーブ朝やマムルーク朝は、（ ）と 呼ばれる紅海を拠点とするムスリム商人を保護した。
→彼らは東南アジアやインドの（ ）、中国の陶磁器などを扱った。
→ペルシア湾岸のバスラや紅海の入口にあるアデンが、中継地点として栄えた。
- ・アフリカ東岸には、8世紀ころから多くのムスリム商人が金、象牙、奴隷などを求めてやってきて、インド洋を利用した交易を行った。
- ・12世紀ころにはモガディシュ・（ ）・（ ）・（ ）・（ ）の海港都市にムスリム商人の居留地ができた。
→現地のバントゥー諸語とアラビア語が混じり合った（ ）など、独自のスワヒリ文化が誕生した。



アデン

アラビア半島の西南部にあり、カーリー商人がインド洋から紅海に入ろうとする時、その入口に存在する港である。現在のイエメンにある。



マリンディ



ザンジバルにあるムスリム商人の墓

マリンディは、大航海時代でも有名になった港町。ザンジバルにあるムスリム商人の墓には、富の象徴として中国産の陶磁器が埋め込まれている。当時の交易ネットワークを物語っている。

- ・インドでは、香辛料と（ ）が主要な交易品として取引された。
- ・南インドで古くから栄えた（ ）は、9世紀ころに再び繁栄した。
→セイロン島（スリランカ）や東南アジアのシュリーヴィジャヤに遠征し、中国の北宋とも交流があった。

東西交易の3つの道

